

浅原さん追悼の辞

内藤 歆修

「内藤さん、やはり癌だった。胃痛らしい」というのが浅原義雄さんの闘病生活の開始の言葉で、平成二二年三月二十日のことでした。

前年十二月前には食べ物の飲み込みに支障を来す程度食道に違和感があった。最初は体調のせいだ、咽喉に物が引っかかるような気がするのだろうと思っていたが、仲々治らないので近くの医者に行ってみたら、大きい病院に行くようにと指示されたらと打ち明けられたのが、私が最初に浅原さんの病気について知った時でした。その時、万が一重大な病気なら、私の息子が勤務している千葉県鴨川市の大きな病院でセカンドオピニオンを聞いてみたらどうだろうと話しておきました。その後、川崎の大きな病院に行って精密検査を受けると、胃と食道の間に癌の影が見えると告げられ、緊張した声で携帯電話に連絡してくれたのが、先の言葉でした。鴨川の病院にすぐに行きたいので、手筈を整えて欲しいという希望でした。その場ですぐに予約を取り、二四日息子の診察を受け、二八日に検査入院することになりました。全身の検査を最新の機械で徹底的にして、四月一日に元気に退院しました。その後暫く、問題なく日常生活や仕事をする事が出来ていたようでした。大学の配慮で授業も大きな負担なく進められると喜んでいました。授業も順調に進み始めた頃、四月二三日、手術入院の前日に浅原さんの研究室で暫く話した時

には、さすがに緊張は隠せないようでした。いつものように、快活に、人を逸らさない話しぶりに一瞬この人は本当に重病人なのかと思うことがしばしばでしたが、話の途中で突然涙を流し、将来の不安な気持ちを述べられた時は、私も肅然とした気持ちになり、次の言葉も直ぐには出てこない有様でした。

その前に、私も息子からおおよその病状の報告を受けていました。個人のプライバシーということで、余り詳しいことは話してもらえなかったのですが、病気の源は胃癌ではなく、食道癌が転移して胃癌にもなったとのことでした。そして、食道癌が発現元の胃癌は、単なる胃癌よりも手術が大がかりになり、咽喉の手術まで合わせてすると、将来に亘っても厳しい状況が続くのだと、息子が憂えていたのが今更ながら思い出されたのでした。浅原さんの口からほぼ同じことを聞くと、強く胸に迫るものがありました。物事に余りこだわらずに、明るい面だけを私などには何時も見せていた人が、不安な感情を吐露するのを見たのは初めてでしたので、大いに驚き不安になりました。

二四日に入院、二七日に手術。夕方に息子から、手術無事終了のメールが入り、その日から暫く集中治療室で経過見を自分自身が担当してすることでした。時々、息子からや、暫くして浅原さん本人から電話連絡が来て、順調に回復が進んでいることが分かり、一安心というところでした。五月七日に一般病棟に移るといので、八日に家内と共に鴨川に行き、浅原さんを見舞いました。息子立ち合いのもとに、会うと大変元気でした。よく来てくれたと喜び、わざわざ手術後の痕まで見せて、回復振りをアピールしてくれました。私たち素人から見ると、直ちに完全に社会復帰し、これからも元気で活動出来そうな感じでした。二十分も話し、こちらが余り長く話していて身体に触らないかと思う程熱心に色々なことを説明してくれました。私たちがほっとして三十分程の面会を終りました。

その日の夕方、息子に大体の事情を聞くと、手術はこの病院外科の最高のチームを組んで行い、目視出来る癌の

部分は可能な限り切除した。胃の殆どの部分と食道の全てを取り、胃の残りの部分を伸ばして咽喉に繋げた。食道が発現の癌は広がると大変危険な場合が多い。今肝臓に転移は目視出来なかったので手術していないが、転移している可能性は高い。今後注意深く見守っていく必要があると、私を不安にするような言葉を口にしました。息子も幼少の頃から浅原さんをよく知っているので、この様な状況は辛いが出来る限りの治療をしてみる。またこれから先のことは起こってみなければ分からないが、当座は日常生活が普通に出来るまで快方に向かうであろう、というのが今後の予測でありました。なんともはや、砂を噛むような索漠とした気分です、その晩息子の住居で親子三人話をしました。翌日、もう一度お見舞いし、彼の全く回復したような顔を見てみると、昨夜の話が信じられず、取り直すのに一苦勞しました。

浅原さんの、この頃の気持を述べた文章が、飛火という同人雑誌にあります。「鴨川暮色」と題された文章が恐らく生前最後に印刷されたものだと思いますが、そこに癌の発見、宣告から、鴨川の病院で手術されるまでの話が記されています。彼独特の軽妙で洒落な文ですが、悲しさや不安が上手に滲みながら、そこはかとなく漂ってきますし、この間の御家族の心配や不安、嘆きなどが良く表されています。癌になってしまった原因を過去を遡りながら分析し、今の自分の姿を納得しようという努力にも見えます。お酒を愛し、お酒に殉じたのかも知れませんが、やがて、肝臓への転移という不安が現実となり、抗癌剤を使用した治療が長く続いたのですが、とうとうその甲斐もなく平成二十三年八月三十一日に黄泉の国に旅立たれました。満六八歳になる誕生日前日のことでした。

浅原さんと私が出会ったのは、昭和五十年十月のことでした。暫く滞在した英国から帰って来て、これからの生活をどうしようかと思っていた時、生来快活で、自他共に認める「ソーシャルな」彼は豊富な人間関係を生かして、家庭教師の口を紹介してくれました。幾つか掛け持ちをしながら、大学院で勉強を続けることが出来ました。

単位を修得し満期退学後、二人の進む方向は暫く分かれ、お互いに異なった大学で教えることになりましたが、時々会ってよく話をしました。それから、三年後、二人は偶然異なったルートで東海大学に教員として入り同じキャンパスで勤務することになりました。この頃の彼はまだ、殆どお酒を飲まず、飲んでも本人の弁ではビール中ビン一本がやっとという状態であったようです。

浅原さんが昭和五七年に跡見学園短期大学に移ってから、私とはまた別の勤務先になってしまいました。この頃からお酒の量が徐々に上がっていった様子が「鴨川暮色」の中にも生き生きと書かれています。四十歳前後から、お酒を嗜むようになっていった訳です。凝り性な所のある彼は一つのことに興味を抱くと、とことんそれを突き詰めなければ気が済まないという性分でした。廻りの先輩や友人に大変立派な人に恵まれて、様々な影響や薫陶を受けていたようでした。この方々はお酒に関しても人には引けを取らない、その道では強者であったようです。何度か言うようですが、彼は大変気持の優しい、争いよりは平和を常に心がけている人でした。明るく快活で人付き合いが良く、一緒にいるとこちらの気持も明るく元気になりました。この社交性も相俟って、お酒の道に益々進んだのだろうと思われれます。勿論素面でも快活ですが、飲めば陽気になり、その場を盛り上げて、相手を大変いい気持ちにしてくれるお酒でした。話をする折、次第にお酒に関しての話題が急速に増えていったように記憶します。入門は多くの種類の焼酎、次は日本酒の純米酒や吟醸酒に移り、その方面に疎い私に幾つかの銘酒を教えてくださいました。「八海山」「田酒」「浦霞」そして「真澄」。平成三年から加わった、同人誌「飛火」に諏訪真澄という筆名で文を書き始めたのは、第二の故郷とも言うべき長野の地とこのお酒をこよなく愛したからのようです。

探求心旺盛で、平成十三年頃から、「東京学」という授業を短大で持つと、江戸や東京についての研究を熱心に進め、江戸の面影を残す神田、根津、湯島などを精査しながら、更にその造詣を深めたようです。研究の途上で、その地域の交流の原点でもあるお酒を供する場所にも出入りし、地域の人々と交わりながら生きた情報を入手し、

フィールドワークにも勉めたようです。その為、東京学の話は、歴史、文化、庶民の生活、住人などと交流に基づいての、謂わば生きた情報によるものなので、大変生き生きとしていて、聞く者の注意を逸らさないものでした。この地元の人たちとの交流でも、大いに役立ったのはお酒についての知識だったと言っていました。

浅原さんの積極的な態度は仕事の面でも当然発揮され、昭和五七年四月に跡見学園短期大学に英文専攻が開設されると共に、専任教員として赴任しその隆盛に尽力されました。英文専攻の学外オリエンテーションは彼の発案で始めたとのこと。このプログラムは入学当初新しい環境に早く馴染むよう新入生の意識を高めるのに大変有益でありました。教育の分野でも、フランス語や英語の授業、それに関連する講義などを担当し、大いに学生の興味をひく知的刺激に富んだ授業という評価を得ていました。元来はフランス語・文学の専門にも拘わらず、英文専攻のカリキュラム中で海外短期留学の授業にも積極的に関わり、イギリスへの研修授業に何度も同行したり、研修旅行にも引率者として参加しました。彼の人は多くの学生の信望を得、旅行は成功裏に終了することが常でした。短大の役職も、学生部長を皮切りに、入試・広報部長、図書館長を歴任し、短大の業務に尽力をなさっていました。平成十八年四月には跡見学園女子大学コミュニケーション文化学科に移り、短大時代にも増してご活躍になっている時に、体調不良になってしまったのは大変残念なことでした。浅原さんが病気になってから、大学の多くの方々が心配なさっていました。更には、私が補講した翻訳論でも、浅原さんの授業を受けたくて選択した受講生が多く、代講になったことを残念がる声を聞きました。

浅原さんの早世を惜しみつつ、筆を擱きます。